



※1 熊本市は水道水源のすべてを地下水で賄っており「日本一の地下水都市」といわれています。阿蘇山による火砕流の噴火は水を通しやすい大地をつくりました。そして、白川中流域(大津町、菊陽町など)の水田は浸透率が高く、その水は熊本市で使用される地下水になります。大津町の水田は、熊本市の地下水を守るために一役買っているのです。

※2 ネットワークの会員が生産する野菜や米は「水の恵み」のブランドで販売されている。「水の恵み」を買うことにより、地下水保全に貢献することができる「ウォーターオフセット」(排出した二酸化炭素を植林や森林保護などで相殺する「カーボンオフセット」の地下水版)として注目を浴びている。熊本学園大学は、学生食堂に同ブランドの米を使用して地下水保全の支援を行っている。

400年以上も歴史がある上井手と下井手。それを生かしたこの町の農業があります。

そう、この町の農業は輝いています。大津町の農業、まだまだ夢があります。そしてもっと大きくなりそうです。

にんじん農家である大田黒さんは、平成13年に中国や韓国などの輸入野菜の急増に危機感を覚え、皆さんに安全な野菜を提供するために、にんじんの大敵である土壌線虫の被害を抑えることができないかと水田に水を張ることを計画しました。線虫による被害が抑えられると農薬の使用も控えられることにもなります。そして、結果は大成功。被害は減り使用する農薬も減りました。コストも下がり、消費者にも減農薬は安心な野菜になる。正に一石二鳥でした。

そして翌年、平成14年に偶然、水田が地下水に関係していること(※1)を知ります。大田黒さんは、もともと田の水持ちが悪いことは経験上知っていたのですが、これをきっかけに田に水を張り1日に何cm減るかを調べる作業を一人で始めました。水は1日で20cmほど減っていたこともあり、この結果に「水を守ることで、衰退している農業に活路を見出そう」と心を固めました。そして、平成16年に熊本市、菊陽町、大津町で地下水を守る保全協定が結ばれたことをきっかけに、ネットワークを設立します。

設立には、委員会を立ち上げて消費者、生産者、一般の人、学者など様々な地下水に興味を持つ人を巻き込み、それぞれが知恵を出し合う形をつくりました。

設立から現在まで「水の恵み」ブランド(※2)の立ち上げや土壌の調査などを行い続け、更には新たな地下水のかん養源として大豆に着目。大豆の生育期間中に水を張ったらどうだろうと思ひ、取り組み始めました。その取り組みが成功すれば、技術は学会などでも発表され、広く伝わっていくことになりそうです。大田黒さんは「論より証拠ですね。良い技術はオープンにしておけば広がっていきますから」と話します。

す。素晴らしい自然の力を利用することで環境に負荷をかけない栽培法が見つかるかもしれない。まだまだわたしたちの知らない何かがあるのではないかと？先人たちが遺した遺産を守り、そして農業を守るために大田黒さんは日々努力を続けています。

紹介した人以外にも農業で頑張っている人がいます。すべての人から「農業を守りたい。農業を盛り上げたい」との思いが伝わってきます。

にんじん農家である大田黒さんは、平成13年に中国や韓国などの輸入野菜の急増に危機感を覚え、皆さんに安全な野菜を提供するために、にんじんの大敵である土壌線虫の被害を抑えることができないかと水田に水を張ることを計画しました。線虫による被害が抑えられると農薬の使用も控えられることにもなります。そして、結果は大成功。被害は減り使用する農薬も減りました。コストも下がり、消費者にも減農薬は安心な野菜になる。正に一石二鳥でした。



熊本県農業コンクール大会(熊本県、熊本日日新聞社、各農業団体主催)は今年で50回目の節目を迎えました。今回、環境部門で「豊かな地下水を育むネットワーク」(会長・大田黒忠勝さん)が優賞を受賞しました。平成16年にネットワークを設立。「水を守ることで、農業を守りたい」をキーワードに活動を広げている同ネットワークは農業にどのような夢を持つのか、会長の大田黒さんに話を聞いてみました。



大田黒 忠勝さん(吹田)

大津町の「宝」は、 このザル田